

第1回講義 ウェスレーの神学的系譜 ウェスレーの生涯

テキスト 藤本満 『ウェスレーの神学』の1頁から87頁により詳しい説明があります。

是非お読みください。第2回講義からは要約を掲載します。

I ウェスレーの生い立ち

初期ウェスレー 1725-1738

ジョン・ウェスレーは英国国教会（CHURCH OF ENGLAND）の司祭サムエル・ウェスレーを父として、母ズナンナとの間の第15番目の子として1703年に誕生しました。第18番目に生まれたチャールズは、オックスフォードの学生時代から兄ジョンと一緒に行動し、長じて英国の賛美歌の父と呼ばれるほど、沢山の信仰の歌を遺しています。ジョンは6歳の頃のある夜、エップワースの牧師館が放火され、燃える牧師館から危機一髪で救い出されるという災難に遭いました。この体験が後に彼の強い召命観に影響を与えました。ジョンはよく「わたしは火事場から取り出された焼けぼっくいである」と語り、主の使命を果たすために救い出された、と証ししています。

彼はチャーター・ハウスで学んだ後、オックスフォード大学のクライスト・カレッジに入学しました。1725年に、彼は英国教会の聖職になる決心を与えられます。そして、その準備としてジェレミー・テイラーの「清潔なる生と死の規則と実践」、トーマス・アケンピスの「キリストに倣いて」、そしてウィリアム・ローの「キリスト者の完全」を読み、それまでの九分通りのキリスト者でなく、真のキリスト者となることを求めて、真剣な信仰生活を始めました。1729年に、ジョンはオックスフォード大学のFELLOW（個人的指導教授の意）となりました。そして、弟チャールズたちの始めたホーリー・クラブの指導者として脚光を浴びることになりました。

「ホーリー・クラブ」で学生たちは聖書を学び、規則正しい聖餐式の実施、大学の学びの予習と復習、朝祷と晩祷を忠実に守る生活を基盤にして、炭鉱街の貧しい子供たちの勉強会、刑務所待遇改良運動、貧しい人々への奉仕活動等を熱心に行いました。メソジスト（METHODIST）という名前はこのような学生たちに対するあだ名として始まりました。几帳面家さんとか、方法論者、つまり、彼らは何をするにも几帳面であり、形式主義者であるという悪口でありました。ジョンとチャールズ・ウェスレー兄弟はこの学生運動の指導者として活躍した訳です。

その結果が、オックスフォード大学の先輩でアメリカのジョージアの総督であったオグレスープの耳に入り、彼らがジョージア伝道に出掛けるきっかけとなりました。しかし彼はその伝道で様々な理由で挫折を経験して、ジョージアから帰国します。17

38年5月24日、ジョンは神の前に真に不十分な人間であることを強く思い知らされます。その日、アルダスゲートのある集会に出席して、司会者が朗読するマルチン・ルターの手紙序文「ローマの信徒への手紙序文」を聞いているうちに、その一語一語がまさに自分のためであった、と強く感じました。彼はその日の日記に「わたしの心が不思議に温まるのを感じた」と記しました。その時、彼は、キリストの十字架の贖いにより、自分の罪が赦されたということを深く心に刻まれ、新しい人間に生まれ変わったのです。このジョン・ウェスレーの「アルダスゲートの回心の出来事」は彼に人生の新しい勇気を与えました。

ウェスレーの初期の思想形成は、1725年の按手から始まります。1726年にオックスフォード大学の研究員となります。この時期のウェスレーは、聖化から義認へという順序を持っており、自分の善行を通して救いの確信を追い求めていました。これは主に聖性を求めテイラー、ウィリアム・ローの影響を受けたことに起因します。彼らは聖なる生活を追求し、Holy Divinesに属します。カロライン神学者との関わりはウェスレーの初期の神学形成に重要な影響を与えたと考えます。ウェスレーは幼少時代より聖性に興味を示し、オックスフォード大学でホーリークラブを形成する。ホーリークラブの原則は（1）すべての人にできるかぎり善を行うこと。（2）機会のあるかぎりできるだけ聖餐を受けること（3）国教会の断食日を厳守することでした。しかし、ウェスレーがこの時代目指していたものは、国教会の良き業の方法化による救いの獲得でした。しかし、良き業がウェスレーにもたらしたものは救いの確信の不確かさであり、彼は救いの確信を持たずに悩む。ウェスレーは救いの与え手であるキリストの約束ではなく自分の善き業の蓄積による行為義認により救いを獲得しようとしていたからです。

中期ウェスレー 1739-60 メソジスト運動、世界へ広がる

ウェスレーは、最後までメソジスト運動を英国国教会の中の信徒活動と位置づけていましたが、1786年アメリカ合衆国が独立し、国教会が司祭をすべて英国に引揚げさせたため、まず新大陸のメソジスト会が非国教会派の教会として独立せざるを得なくなりました。そしてウェスレーの没後、1797年には英国のメソジスト会も独立したメソジスト教会となりました。

それまでの教会は、各教会ごとに一定の地域とその住民を管轄する形をとり、その地域を教区 (Parish) と呼んでいました。それに対しメソジストの教師たちは、それぞれが分担して各地のメソジスト会を巡回訪問して信徒たちを指導する形をとっていたため、自らの担当区域を巡回区 (Circuit) と称しました。教師一人一人の分担がサー

キットとなるため、時には地理的に全く離れた地域が同一のサーキットに属するという事態も稀ではありませんでした。

ジョン・ウェスレーはこうした体制の下にさらに先を展望し、生前「世界はわが教区 (Parish) なり」との信念を掲げました。自らの活動を、一定の地域に限ることなく、まさに聖書が告げるように「地の果てに至るまで主の証人となる (使徒言行録1章8節)」ことを志し、熱烈な伝道精神をたぎらせていたのです。

かくしてメソジスト教会はウェスレーの志を受け継ぎ、まず北米大陸に、そしてアフリカやアジアの未だ福音を知らない諸地域に向って、活発な伝道活動を展開していきました。18、19世紀は交通・通信手段の目覚ましい発展にも支えられて、キリスト教の諸教派はこぞって世界伝道を志しましたが、その中核を担って極めて熱心な伝道活動を展開したのは、「世界をわが教区」としたメソジスト教会であり、しかもその活動は単なる教理としての福音の伝道というに止まらず、教育に福祉に、あるいはさまざまな社会活動にと、まさに「キリストの愛に日々共に生きる」運動 (ムーブメント) として展開されていったのでした。

ウェスレーの生涯の中期は、リヴァイヴァルがおこり、その間、起こったメソジストソサエティの勃興と組織化につきます。ウェスレーはメソジストの神学を明確化したいと考えていました。ウェスレーは恵みの教理の強調が、救いにおいて反律法主義 (恵みがすべてであり、わざは不必要なだけでなく神に対する信頼において害となるもの) に陥る可能性があるとししました。ウェスレーは回心者に非常に洗練されたスピリチュアルフォーメーション (霊性の形成) のプログラムを課しました。それは、他のキリスト者との交わりと牧会的なケアに焦点を合わせたものでした。

教理的には、信仰による義認が先にあって、聖化の道を歩むという秩序づけがなされません。自己に聖性があるかどうかと心配し、自己の状態を見つめることよりも、神の罪の赦しと救いの約束の言葉を受け取り、信じる事に焦点が置かれたからです。ウェスレーは先行する恵みを与えられ、義認に至り、聖化の道を歩み、救いの完成を目指して歩むという順序を発見しました。ウェスレーはそれを「救いの聖書的方法」(Scripture way of

Salvation) と名付けます。この発見は1738年の一般的に第2の回心 (アルダスゲート街の回心) と呼ばれる回心を中心に行われます。中期のウェスレーの関心は個人主義的なものです。1744年に開始された年会は、メソジズムの特徴をさらに発展させるものでした。「心と生活のホーリネス」はウェスレーの大切にされたフレーズでした。

後期ウェスレー 1760-91 聖書の人ジョン・ウェスレーの信仰

ジョン・ウェスレーは、人は誰でも信仰により、神の恵みにより義とされ、救われる、ということを教えました。又、人は誰でも、信仰によって聖化されることを熱心に伝えました。神の賜物は地上で、いま与えられ、その聖化を達成することが出来るとい

う理解でした。

主イエスは「だから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全なものとなりなさい」（マタイによる福音書第5章48節）と語られました。この「完全」という語はギリシャ語で「テライオス」と言います。この語は「テロス」という名詞から出来た形容詞であります。「テロス」という語は目標、目的、終着点を意味しています。すなわち、すべてのものはその創られた目的を果たすとき、完全であるということです。人間が創造され、この世に送り出された目的を果たすときに、その人は「テライオス」、つまり、「完全な人である」という意味になります。

創世記第1章27節によって、人間が創造されたのは、神の栄光を反映するためであります。この神の特質はマタイによる福音書第5章45節から48節に示されているように、あらゆるものを含めて、等しく無条件に愛することにあります。

したがって、私たちが隣人を愛し、他者を赦し、無条件に人を愛し続けることを求めるならば、聖書の示す完全な人となるのであります。完全とは、愛における完全であります。キリストの恵みへの信頼によって、私たちは神の像を取り戻します。それは又、主イエスの言われた「心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なる神を愛する」ということと、「隣人を自分のように愛しなさい」（マタイによる福音書第22章37節から39節）という、この二つの言葉に尽きることが、ウェスレーの言う「愛における完全」であります。そしてそれは自力によらず、神の恵みによって可能であると、ウェスレーは聖書に基づいて証したのであります。しかし、その完全は絶対的無謬ということではありません。絶対的完全というのは神のみにあります。人間は無罪にはなり得ないのであって、いわば絶対的完全であり得ないのです。人間はただ信仰によって神の愛に満たされるとき、はじめて罪の衝動が、もはや及ばなくなるのです。

メソジスト教会が起こした運動は、地域的に全世界に拡がっていただけでなく、あるいは労働運動の原点として、また福祉制度の原点として、今日の社会に様々な形でその影を落としています。そればかりかウェスレーの唱えた“Gain all you can, Save all you can, and Give all you can!” 「大いに獲得し、大いに節約し、大いに捧げなさい」という言葉に近代資本主義社会の基本理念が存するとすら言われているのであります。

ジョン・ウェスレーの生涯は、まさにその道程としての「完全」を示していました。メソジスト運動を起こしてから彼は、ロンドン、ブリストル、ニューキャッスルを中心に、求めに応じて馬や徒歩で町々を巡り、各地で説教し、会員の生活訓練、指導にあたり、貧しい人々のための学校や福祉施設の設立に奔走しました。生涯を通じて彼が旅行した距離は約35万キロ、50年間に4万回を超える説教をしたと伝えられています。弟チャールズをはじめ他の多くメソジスト指導者たちもこれに倣ってその生涯を捧げました。

馳せ場を走り終えたジョン・ウェスレーは1791年3月、次の言葉を残して88年の生涯を終え、天に召されました。“The best of all, God is with us”「最も良きことは神が共にいまし給うことである」が最後の言葉でした。

思想的にはどうだったでしょうか。野外説教や組会等の新しい牧会方法を中心にメソジスト運動を展開し、様々な社会的な関わりを展開します。ウェスレーの目標であった救いの聖書的方法の現実化が起こり、個人の実存だけでなく、宇宙論的な壮大さを持つ社会的聖化論に至るダイナミックな神学が完成されました。ウェスレーは宗教を「経験的宗教」(Experimental Religion)あるいは「実践的神学」(Practical Divinity)と表現します。英国教会の神学の特色は聖書、伝統、理性という英国教会の三支柱の検証を宗教経験として捉える総合的な知であり、ウェスレーにおいては神の恵みはこの世で経験できるものとして捉えられています。ウェスレーは1750年に「普遍的精神」という説教を行うが、教理的理解の相違をこえて、普遍的精神を共有しながらメソジストソサエティを形成していきました。しかし普遍的精神は許容範囲をもうけて形式等を見捨てることとは異なります。この普遍的精神は、初代教会、英国教会、教父に共通する純粋なキリスト教、霊性を本質的なものと考え、それによって英国教会の刷新、改革をめざしたのです。プラクティカルディヴィニティが、ウェスレーの牧会の幅広さを可能にしたものであると同時に、英国教会に土台を置きながらも様々な形で英国教会に存在しなかった斬新な牧会方法を生み出した実践性をもたらしました。

後期においてウェスレーは、メソジズムを定義するのを助ける大きな神学的な事項に直面していました。「完全主義者との議論」は1760年代の初期に始まったものです。ウェスレーが常に危機的な経験同様に強調していた過程を経た(漸次的な)聖化を追随者の一部が軽視しました。ウェスレーは、問題を解決する為に会議を招集しました。ウェスレーは自分の立場を以下の説教で明確化します。「完全について」(1761)(信仰者の中の罪)(1763)、そして最も包括的には「キリスト者の完全」(1766年に最初出版、1777年には再版)を出版したのはそのような背景があったからです。

ジョージ・ホイットフィールドはウェスレーと共に長年助け合って歩きました。しかし二人は予定の教理においては一致できませんでした。議論への応答として、ウェスレーは「予定について」(1773)「必然性に対する一考察」(1774)「自分の救いの達成につとめて」(1785)を出版します。ウェスレーは自分の選に反対する立場から決して揺れ動いたりしませんでした。ウェスレーの生涯の時期において、英国教会からの分離に対する議論は頂点を迎えました。聖餐はウェスレーにとってとても重要であったために、フランシス・アズベリーとトーマス・コークへのメソジストの接手を承認しました。そしてウェスレーは彼らを1784年にバルチモアにおける年会で「監督」として任命したのです。

メソジストソサエティのメンバーは1767年には25,911人、1777年には3

8, 274人、1787年には62, 088人であり、1791年には72, 546人でした

I エプワースからアルダスゲートまで

この課の目標

- ① 英国教会の宗教的、政治的な文化的背景について理解する。
- ② 家族、教育、ウェスレーへの按手がジョン・ウェスレーの霊的形成にどのように影響したかについて把握する。
- ③ トマス・ア・ケンピス、ウィリアム・ロー、ジェレミー・テイラーがウェスレーに与えた影響について理解する。
- ④ ジョージアにおけるウェスレーの宣教の実際と失敗について学ぶ。
- ⑤ アルダスゲート体験がウェスレーの霊的発展に与えた影響について理解する。

ウェスレーの引用

ジョン・ウェスレーはアングリカンとして生まれ、育てられ、按手を受けました。しかし、「私はインディアンを回心させようとアメリカに渡ったが、あー、誰が私を回心させてくれるのだろうか。」（日誌1738年1月24日）と語り、また、アルダスゲートが近づきつつあるときに、「私の切望している信仰とは、キリストの功績によって罪赦され、神との和解をいただき、神の好意へ入れられるという、神への確信と信頼である。．．．私は、持っていればそれを自覚することができるであろう。この信仰を切望する」と語っています。

ウェスレーは、常に自覚できる信仰を求めて、特に、救いに与る時に与えられる喜びを求めていた人物でした。それがなかなか与えられない苦闘を感じる言葉です。受講者の皆さんは、どこで信仰を測られているのでしょうか。そのことを頭に置きながら上の言葉の意味を深く考えてみましょう。

ウェスレーの神学

ウェスレーは、ジョン・カルヴァンのように組織神学を書いたわけではありません。一つの場所にとどまり、彼が信じたキリスト教の教理について書いたわけではありません。ウェスレーは、彼の実践的な著作、たとえば説教、日誌、手紙を通して、それを紡ぐような形で教理を展開したと言えます。ウェスレーはその意味で実践的な神学者と呼ばれていることは事実です。またウェスレーは「折衷的な神学者」だとも言われています。彼は、自分が用いることができる様々ものから、最善のものを選び、創造性を持ちつつ、それを神学的な視点へと統合することができる能力を持ち合わせているからです。この意味でウェスレーの解釈する鍵となる方法は、中庸(Via Media)と呼ばれる彼や英国教会の思考方法

に学ぶことです。

歴史的な文脈

ヘンリー8世は、ローマ・カトリック教会から1532年に英国教会を分離させました。彼は、后を6名も変えながら、最初の王妃キャサリンと離婚するために、英国教会を独立させたのです。エドワード6世は、8歳で王になったと言われていますが、彼は、克蘭マー主教の指導のもと、英国教会の様々な思想を発展させ、特に第1祈祷書は有名です。英国教会の公式の神学的声明は「信仰39箇条」にみることができます。英国教会にとっても2つの重要な信仰的な発展をみることができるのは説教集(The Book of Homilies) (1546)と祈祷書(The Book of Common Prayer) (1549)です。統一令(The Act of Uniformity)(1559)は中道の立場を英国教会内にもたらしの助けました。

英国教会の特色は中庸(Via Media)ですが、ウェスレーは、様々な対立概念を包括的に理解し、信仰の実践に役立たせていきます。元来、高教会主義(儀式に高い尊敬を置く立場)で生まれた彼が、その伝統を継承しつつ、新しく出会う様々な立場と誠実に対話していったウェスレーの姿に学びたいと思います。

重要な影響

初期、ウェスレーに影響を与えた3人の人物がいます。

① トマス・ア・ケンピス(1380-1471) ドイツ人の神秘主義者、『キリストに倣いて』の著者 ジョンは彼の著書を読んで、あまりの道徳的な厳しさに健全は反発を覚えています。しかし、「キリストの姿に至るまで」、「キリストに倣う」という思想は、ウェスレーの聖化概念にとって重要な役割を与えました。この書は日本語でも出版されていますので是非読みましょう。

② ジェレミー・テイラー(1613-67) 『聖なる生と死の規則と実践』私は、個人的にはジェレミー・テイラーの影響が一番大きかったと考えています。詳しいことは、私の論文をみていただければと思います。(<http://www012.upp.so-net.ne.jp/marksakamoto/sub1.htm>) を参考の事

③ ウィリアム・ロー(1686-1761) ウェスレーの同時代人 2冊の著書 『キリスト者の完全』『献身と生なる生活への厳粛なる召命』を記しました。

これら3冊の書物を通してウェスレーはホーリネスが以下の3つを含むことを学びました。

- ① 聖なる生活の規範としてキリストに倣うこと
- ② 動機の純粹さ
- ③ キリスト者の完全の決定的な規範として神と隣人とを愛すること

資料1 説教 「信仰による救い」を読みましょう。

キリスト者の完全の平易なる説明

それは、動機の純粹さであり、神にすべての生活のすべてをささげることの意味します。つまり、私たちの気質すべてをもって聖くなりたいという一つの望みと神のご計画によって支配していただくものです。私の一部だけでなく私たちの魂、体、存在そのものを神にささげることです。別の見解によれば、それは、キリストに心を支配していただくことであり、キリストが歩まれたように私も歩くことです。内的にも外的にも汚れているしみからきよめられる「心の割礼」を求めるのです。それは、神の像にむかって心の刷新を受けることであり、キリストのように全く似ていくことです。しかし人間関係の面から言えば、神を全く愛し、自分と同じように隣人を愛することです。

モラヴィア派の影響

ウェスレーはモラヴィア派に最初に出会ったのは1735年でした。それはアメリカのジョージア州に行く船の中でした。ウェスレーはモラヴィア派の人々の自分の救いの確信に強く影響を受けます。彼らはルターの要理であり、死んだ時に与えられる救いを信じていたのです。モラヴィアンのピーター・ペーラーはウェスレーの相談に何回が乗り、「信仰を持つまで説教し続けなさい。信仰を持てたら、その信仰を説教しなさい」と語るのです。

友人への手紙の中で、自分の心における運動の中心について以下のように語ります。

おー 私の魂にあなたの純粹な愛のみが宿りますように
あなたの愛が私のすべてでありますように
私の喜び、宝、王冠でありますよう。
不思議な炎は私の心から取り去られることはありません
私のどの行為も、言葉も考えも、愛で満ちていますように

ジョン・ウェスレーの最後の言葉 「最善のことは神が共におられるということです」

自叙伝に関するもの

第1に、ジョンウェスレーは彼の時代において伝説的な人物でした。第2にウェスレーは同時代にとっては、非常に評価が分かれる人物でもありました。第3にウェスレー自身の著作は「公的な」ウェスレーと「私的な」ウェスレーを示しているものとして解釈することができます。その結果、最終的に、歴史家はしばしばウェスレーの逆説的な側面を

取り扱わなければならないのです。ウェスレーの神学は長い年月の間に発展しました。後期ウェスレーは彼の初期、中期を成熟した神学的な立場へと統合されたものです。

ウェスレーの3つの目標

ウェスレーには、3つの目標がありました。それは、「魂の救い」、「心と生活のホーリネス」、「人々における正義の確立」です。ウェスレーが目指したものは、個人の中に福音的回心が起こり、心と生活のホーリネスがこの世で獲得され、それが発展的に社会にまで進展していくという救いの順序(Ordo-Saltis)であり、それが個人の実存的な経験だけでなく、現実のクリスチャン生活において経験可能なものとして展開されています。

資料2 説教 「自分の救いの達成に努める」を読みなさい。